ゆめ半島 千葉国体 2010

国体の記憶 1

「輝き」支えあってこそ

武田 智子さん（江弁須）
（旧姓：伊藤）

成田高校時代、軟式テニスで2年連続国体出場。卒業後、長瀬ゴム工業（株）（現ナガセケンコー）入社。昭和61年全日本総合選手権（皇后杯）個人戦優勝、昭和62年世界選手権団体優勝。

軟式（ソフト）テニス・千葉県代表として出場した「島根・くにびき国体」（昭和57年）で優勝。

「本当にうれしかった。平野監督、澤田コーチ、先輩たちのためにどうしても取りたかった日本一。涙が後から後から出て止まりませんでした」

テニスを始めたのは、中学生のとき。アニメ「エースをねらえ」に刺激を受け、迷わず軟式テニス部を選んだ。人一倍練習し、憧れていた全国有数の強豪・成田高校に進学。2年時にレギュラーの座を射止めた。

その年、成田高は本来の実力を発揮できず、何度もくやしい思いを味わっていた。卒業を控える3年生にとっては、この国体がタイトルを手にするラストチャンス。「お世話になった先輩との最後のプレー。何としても勝ちたかった」と挑んだ大会は、屈辱のノーシードからのスタートだったが、2回戦で第1シードの福岡県を破るとそのまま勢いに乗り、優勝へと突き進んだ。

翌年の群馬国体にも出場した。「うまいテニスではなく、強いテニス」を常に目指してきた高校時代の集大成として臨んだが、決勝で敗れ、連覇には一歩届かなかった。しかし、勝敗のみにこだわってきた自身に、身に染みて分かったことがある。「開催地の人たち、千葉県関係者のもてなしや声援はとても温かく、何度も励まされました。たくさんの人たちに支えられて選手として輝ける。そういう意味で国体はほかの大会とは違い特別でした」

今でも母校のコートに集まる地元の中学生と一緒にラケットを振っている。なかなか時間が作れず、週に一度ほどだが、ソフトテニスへの想いは変わらない。「来るんですよね、国体が。スタッフとして、それもできればソフトテニスで、選手たちを応援したい」あの感動を子どもたちと分かち合える日を、今から楽しみに待っている。

島根国体で準決勝・大阪戦に臨む白紙・伊藤（右）ペア（昭和57年）

編集後記

今回から「国体の記憶」を連載することになりました。これは、2010年の「ゆめ半島千葉国体」に向けての企画となります。前回の千葉県で開催された若潮国体が昭和48年。その時参加した人の紹介も予定していますが、ほかにも市民の皆さんで出場経験のある人を募集しています。どんな種目でも結構です。広報課までご連絡ください。

成田市役所本庁舎（行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署）はISO14001の認証登録を受けています。

平成20年10月15日号 No.1133　成田市のホームページ http://www.city.narita.chiba.jp

平成20年10月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 花崎町760番地　電話22-1111（大代表）
広報なりたは再生紙を使用しています。